

## 私の戦争体験記

宗像市 清水 徳代

朝鮮北部咸鏡北道、咸興、終戦の日を私はこの地で迎えた。小学6年生であった。その3ヶ月程前、朝鮮北部にはまだ寒さが残る早朝、咸興駅に担任の先生が出征されるのを送った。まだ若く元気なはつらつとした先生、ちぎれる程旗をふって別れた。先生はクラスの全員に1枚のプリントを残された。50年たった今、内容はどんな事であったか、もう私の記憶から消え去ってしまい、ただ最後に『薫風や遺髪とならん髪を刈る』という句で結んであったのは今だにはっきり覚えている。そしてその1枚の紙を宝物としてリュックの底に入れてあったのだが、最後の引揚船の中で紙が必要になった時とうとう私の手許からなくなってしまった。小学6年、多感な年代、先生にもしもの事があつたら、そしてこれは先生の形見になるかもと大事にして、逃げ回る時もいつも肌身離さず持っていたのに、と今は残念でならない。

朝鮮半島北部の冬はきびしい寒さで雪は身の丈程に積もり、オンドル、ペチカ、ストーブで冬を過ごした。南から北へと父の転勤で動き、北には3年近くを過ごした。この父の転勤で、これから先の私達一家が悲惨な運命をたどることになるとは誰もが予想し得なかった事であった。終戦を境に今までの平穏な日々は一転し、毎夜毎夜ソ連兵の掠奪と強姦から逃げ回る日々、そして家は追い出され知人宅を転々とし、最後は町中の昔の古い旅館に日本人は収容されてしまった。

身一つ、わずかな衣類は許されたが、4、5畳に親子5人重なり合う様にして眠り、入浴をした記憶はない。そこでしらみがわき、毎夜毎夜寝る前には裸になって、しらみを取るのが日課であった。そして発疹チフスの流行、姉が妹が母が次々と発病し、隔離病院へ連れて行かれた。そこで大部分の人が亡くなった。幸いにして私共家族は命を長らえて、またそれから苦難の道歩くことになるのであった。終戦直後に男の子を出産し、混乱の中、また不潔な生活のため菌が入り、肺血症筋炎、丹毒と次々と発病した母、生まれた子は死産であった。父がどこからか拾って来たリンゴ箱に入れ、山に埋めたとのことであった。母は高熱と痛みにうめき、町はずれに病院らしきものがあると聞いて姉と二人、リヤカーに母を乗せて連れて行った。大きく腫れあがった腕や足、消毒も麻酔もなしに手術し、中の血膿を出した。その時の母の叫び、生身の身体にメスを入れる、それがどんなであったかは、「いっそ殺してくれ」という母の吠え、まるで虎かライオンのようであった。薬もなく縫合することもできず、傷口にはガーゼがつめこまれてあった。そしてその悪臭のする血うみだらけのガーゼを姉と毎日洗ったそのつらさ、母のためにと一生懸命であったが、水の冷たさ、臭気、未だに忘れられない。そして病院の庭のあちこちにそこで亡くなった人が埋められ、土の中から片手や片足が宙に浮いたようにとび出して臆病者の私は見る度に悲鳴をあげたのを覚えている。

そして8ヶ月の収容所の生活の後、残った日本人家族は脱出することになった。夜の暗闇を

歩き、昼間は山の中に隠れるということであった。私達は病の癒えぬ母を姉が背負い、父と妹5人の家族はいつも列の先頭を歩いた。だが私達は人々から追い抜かされ、気がつくとも一番後をかろうじて歩いているのだった。列から離れたら二度と日本の土は踏めないと、他の人々が休憩の間に私達は先頭までやっと進み、ただひたすらに歩き続けた。小学生の私と妹は、夜の道を必死で歩いたが、足だけが動き半分眠った状態で幾度か父にどなられた。そして銃声が響き検閲を受け、めぼしい物は没収される。リュックの中にはわずかな食料と寒さを防ぐ肌着ぐらいしか入っていないというのに子供心に悲しかった。だが8ヶ月の抑留生活、そして脱走、その間死を考えた事は一度もなかった。そんな余裕がなかったのか、また生きて日本の土を踏むんだという強い気持ちがあったからか自分でもよく分からない。父母がどんな思いであったかは知ることもしなかったし、その時の気持ちを聞くこともないまま父と母は昭和を生き抜き、平成に入って相次いで他界した。きっと子供のためにどんな事があってもくじけてはならないと、決して弱気になることはなかったのだと思う。特に母は病身でありながらよくがんばったと思う。その精神力には頭の下がる思いである。

あの混乱の中、日本の土を踏めたのもやはり多くの人々に助けられ、家族が励まし合った結果だと思う。改めて今は亡き両親に感謝の気持ちで一杯である。38度線を越え、貨車に乗せて貰い、釜山のお寺でおにぎりを貰った時の嬉しさ、引揚船の中で日本の国が近づいて来るのに胸のふるえる思いがした事、母の故郷に帰った時の親戚の驚きよう、まるで浮浪者の一家であった。ここからまた日本での無一物の苦しい生活がスタートしたが、同じ苦しみも日本での生活は朝鮮半島北部とは全く違ったものがあった。

家族が懸命に働き、人並の生活ができるようになり、それからまた更に少しずつ生活が豊かになった今、あの時の事はともすれば私の記憶からうすれがちになるが、この体験は決して忘れてしまってはならないのだ。

戦争によってどれだけの人々が命を奪われ、どれだけ多くの人々が犠牲になったかを思う時、もう二度と戦争はあってはならないと強く訴えたい。引揚げ後は、母が何かにつけてその体験を語り、聞く人々も涙したことだったが、そんな話もいつの間にか風化してしまった。もし母が今生きていたら、書く事が好きで新聞の投稿にいつも母の名があった人だけに、きっと自分の体験を綴ったに違いない。戦後50年を生きられなかった母に代わって私の拙い文が母への追悼となればと思い書き綴ったが、どんな戦争体験にせよ決して風化させてはならないと強く思っている。そして声を大にして二度と戦争は起こしてはならないと言いたい。